



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4456 号 2018.6.22 発行

「ポジティブになるきっかけの場に」大阪・ミナミに発達障害に悩む人たちが集うバー

産経新聞 2018年6月21日

「同じ悩みを持つ人が気軽に集まれる場所にしたい」と話す橋際義さん（右）＝大阪市中央区東心斎橋



発達障害のある人が集うカフェバーがミナミにある。店主は、自身も当事者である橋際義（はしぎわ・つとむ）さん（33）。同じ悩みを持つ人が気軽に集まれる場所を作りたいと、2年前に店を開いた。客の悩みに耳を傾けながら、得意なことを聞き出して店でイベントを開いてもらうことも。客同士が交流し、前向きになれる場所を

目指している。

飲食店やバーが集まる東心斎橋の雑居ビルの4階にカフェバー「金（きん）輝（き）」はある。15人も入れば満席になるこぢんまりとした店だ。

じっとしているのが苦手な人と落ち着くという人のために知恵の輪を用意し、特定の分野に強い関心がある人のためにさまざまな種類の図鑑をそろえるなど、「お客さんの意見を取り入れて、過ごしやすい店を目指している」と橋際さん。

自閉症の啓発カラーをイメージした青色のカクテルや、健常と障害の間を示す「グレーゾーン」をテーマにした灰色のカクテルなども人気で、「黒歴史撲滅カクテル」「人生激甘カクテル」などユニークなネーミングのカクテルもある。

橋際さんは神戸市出身。子供のころは自覚がなかったが社会人として働き始めると、「コミュニケーションがおかしい」と指摘されるようになったという。ミスを叱責されることも多く、インターネットショッピング関連の企業や印刷工場などで勤めたものの、長続きしなかった。職業訓練校に通っていた26歳のときには共同作業で自分の意見を主張しすぎて周囲から浮いてしまい、人間関係がうまくいかず鬱病に。病院で診察を受けた際、発達障害と診断されたという。

「驚いたが、無意識に余計なことを言ってしまうたり、ばか正直過ぎたり、言われてみれば当てはまる場所があった」と振り返る。

自分なりに努力をしても周りに理解されないつらさに孤独を感じたが、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）の「ミクシィ」で同じように発達障害で悩む人たちとつながり、一人ではないことに気付いた。さらに、実際に会って交流する企画が好評で、毎日集まれる場所を作りたいと、店を開く夢を持つようになったという。

オープン以降、ツイッターなどで店の存在が広まり、今では北海道や鹿児島から訪れる客もいる。客層の中心は25～35歳で、周囲に発達障害を隠している人もおり、「ここなら自分らしくいられる」とたびたび足を運ぶ客も少なくない。「誰にも相談できない人は多く、悩んでいるのは自分だけではないと分かるだけでも、金輝に来てもらう意味があると思う」と橋際さんは話す。

交流を促したいと、客が発案するイベントを毎週末のように店内で開いているのも特徴

だ。発達障害のある児童の支援施設で働き、自身も当事者の足立悠さん（30）＝大阪市旭区＝は、大学時代に専攻した哲学の知識を生かして哲学カフェを開催。「自分を表現できる場になっている」と生き生きとした表情を見せる。

イラストが得意な客同士の交流会や読書会などもあるほか、今月9日には発達障害を公表して働いている人と公表していない人がお互いの仕事環境について話す情報交換会も開かれた。橋際さんは「つらさやしんどさを語るだけで終わりにせず、ポジティブになれるきっかけを作る場所にしたい」と話している。

平日午後3～10時、土日曜午後1～10時。火曜定休。問い合わせは（電）050・5594・7695。

発達障害 人との意思疎通や交流が難しい自閉症スペクトラム障害（ASD）、落ち着きがなく気が散りやすい注意欠陥・多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）などがある。生まれつき脳の機能に障害があるために起きると考えられている。悪気はないのに空気が読めず相手を怒らせてしまう、何度も同じミスを繰り返してしまうといったことから学校や職場で孤立し、二次障害で鬱病を患う人もいる。

作業所の初作品見に来て 光

中国新聞 2018年6月21日

■展示即売会に向け、さをり織りに取り組む利用者たち

光市島田の商店街ビー・ストリートにある障害者福祉作業所「monouniver（ものゆにば）」で、30日と7月1日、利用者の作品の展示即売会が開かれる。障害者への理解を深めてもらおうと初めて企画。利用者たちが作品づくりを急いでいる。



地震渋滞 招いた「想定外」 踏切通れず、救急車遅れる



日本経済新聞 2018年6月21日

大阪府北部で震度6弱を記録した地震では、幹線道路や周辺が大渋滞し、交通網がマヒした状態が続いた。意外な障害になったのが鉄道の踏切。運休によって遮断したままの状態が続き、車が通れなくなったり、救急車の到着が遅れたりするケースが相次いだ。消防関係者は「想定外の事態だった」と振り返る。

鉄道の運休に加え道路の大渋滞で、徒歩で帰る人たちが歩道を埋めた（18日、大阪市内）

「踏切が開かないので迂回してください」。18日午前11時すぎ、阪急京都線摂津市駅（大阪府摂津市）そばの踏切前で立ち往生する救急車に、市消防本部から無線の指示が入った。

同本部によると、運休した阪急京都線の踏切で遮断機が下りたままになり、通行できない車で混雑。地震の揺れで転倒した70代女性の自宅に向かう救急車は到着まで42分かかった。平時は同市内で救急車が現場に到着するまでの時間は平均7分という。

女性は脚を骨折した可能性があったが命に別条はなかった。消防の担当者は「踏切が開かず渋滞が起きるのは想定外だった。もし緊急処置が必要な患者だったらと思うとぞっとする」と振り返る。

吹田市でも救急車の到着が遅れが出た。市によると、18日午前10時40分ごろ、阪急京都線正雀駅南側の住宅から通報があり、線路を挟んで北側の消防署から救急隊が出動。最寄りの踏切を迂回したため、通常より到着に時間がかかった。踏切付近の渋滞が影響した可能性もあるという。

阪急電鉄によると、遮断機は踏切の前後を列車が通過したのを感知し、自動的に上げ下

げする仕組みになっている。地震発生から運行が再開するまで、複数の踏切で遮断機が下りたままになっていたという。下りた遮断機は作業員が安全確認をして手動で上げるしかなく「復旧に向けて人手が足りない状況では難しかった」（担当者）。

J R 西日本の踏切も同様の仕組みで、担当者は「広範囲で乗客の安全確保や線路点検などの作業を進めていたため、それぞれの踏切に対応するのは難しい状況だった」と説明する。

関西大の安部誠治教授（公益事業論）は「無理に遮断機を上げると再開したときにかえって危険。救急隊などは災害時に踏切を迂回することを想定しておくことも必要だ」と話す。

高速通行止めが拍車

大阪府などによると、18日は大阪市中心部から茨木市や高槻市など府北部にかけて広い範囲で、新御堂筋や国道1号、同171号など幹線道路を中心に渋滞が多発した。日本道路交通情報センターによると、府道2号（大阪中央環状線）の茨木市から東大阪市までの区間で18日午前10時には渋滞が約13キロに達した。

一因となったのは高速道路の通行止め。西日本高速道路（NEXCO西日本）によると、午前8時ごろから約5時間、府北部を通る11路線の一部、全長520キロの区間が点検のため通行止めになった。地震発生が通勤時間と重なったこともあり、混乱が広がった。

1日に約20万人が利用する大阪シティバスでは全系統で1～2時間の遅れが発生、運休する便もあった。

大阪市淀川区のタクシー会社で運行管理を担う男性（61）は「渋滞で機能不全になった」とため息をつく。地震当日、同社には普段の約10倍の100～200件の配車依頼が来たが、渋滞で乗客のもとに向かえず、断ることが多かったという。

大阪府は府内の国道や高速道路など117路線を「広域緊急交通路」に指定。震度や被害者数、他都道府県からの救援車両の受け入れ台数などを勘案し、一般車両を通行止めにする道路を決める。18日の地震では被害規模などを考慮し、通行規制は見送ったという。

東京大大学院の広井悠准教授（都市防災）は「交通規制を実施しても他の道に車両が流れ込み、都市全体としては混雑の解消につながらないこともある」と指摘。「渋滞を減らすためには、一人一人が意識して都市部に流れ込む車の量を減らすことが大切」と話している。

地震 震度6弱 豊中、高槻にボランティアセンター開設 在住・在勤者募る /大阪

毎日新聞 2018年6月21日

豊中市と高槻市に20日、災害ボランティアセンターが開設された。豊中市社会福祉協議会が設置したセンターでは、高齢者や障害者、子育て世帯などを対象に、家財整理などの支援をする。派遣先は市内に限る。市内のボランティアで対応し、新たに募集はしていない。支援の問い合わせ・申し込みは同市社協（06・6848・1000）。高槻市と同市社協が設置したセンターでも、家の中の片付けやブルーシートかけなどを想定。自力でできない人を支援する。ボランティアは市内在住・在勤者に限って募集する。問い合わせは（072・674・7496）へ。【亀田早苗】

関東・東北豪雨 カフェで商店街明るく NPO開設「気軽に話を」 介護や障害の相談も 被害の常総・水海道 /茨城

毎日新聞 2018年6月21日

関東・東北豪雨（2015年9月）で被災した常総市水海道宝町の商店街で、地元のNPO法人「みんなの広場」が20日、地元の人々が集まれるカフェ「コミュニティカフェひろば」を開店した。計画した理事長の鈴木悦子さん（53）は「気軽に集まり、ゆっくりと話ができる場所にしたい」と話している。【宮田哲】

同法人はこれまで障害者のダンス教室などを開いてきた。しかし水害の影響もあって人通りが減った商店街を見て、鈴木さんは「町を明るくする場所をつくりたい」と考えたという。

課題は資金だったが、中心市街地の活性化につながる起業を支援する同市の「ビジネスプランコンテスト」に応募したところ、特別賞を受賞。活動資金100万円を獲得した。さらに民間の助成金も得られ、開店資金約500万円のめどが立った。

カフェを開いたのは、関東鉄道常総線水海道駅前の商店街にある空き店舗。以前はうどん店で、内装は手を入れたが、厨房（ちゅうぼう）の設備はほぼそのまま活用している。店内はテーブル、カウンターの椅子席計15席と座敷がある。介護や障害について相談を受ける場所にもしたいと考え、個室も設けている。また提供する飲み物は1杯250～300円と手ごろ。鈴木さんは「高校生がここで勉強してもいい」という。

開店した20日には、ここでうどん店を営んでいた大家の土井仁さん（87）もお祝いに訪れた。「すばらしく現代風な店になったなあ」と笑顔を見せ、「この店ができて通りがにぎやかになれば」と話していた。営業時間は午前9時～午後7時。同店（0297・21・2232）。

ひと 武藤将胤さん＝ALS患者として本を出版した 毎日新聞 2018年6月21日



武藤将胤（むとう・まさたね）さん（31）

全身の筋肉が次第に動かせなくなる筋萎縮性側索硬化症（ALS）と宣告されたのは2014年10月、27歳の時だった。当時は大手広告会社で将来を嘱望されたプランナー。発症後もクリエイターとして、新たな商品やサービスを生み出すことに挑戦し続けている。

16年に患者の生活向上を支援する団体を設立した。障害者と健常者の間に垣根のない未来を実現させたい。「さまざまな制約はあっても、アイデアで壁は乗り越えられる」と確信している。

目の動きだけで音楽と映像を操るアプリ「EYE VDJ」の開発▽介護保険が適用されない40歳未満向けの新型電動車椅子のカーシェアリング事業▽全ての人々が快適に着られるためのファッションブランド設立―と活動は多岐にわたる。いずれも障害の有無に関係ない、ボーダーレスで洗練されたデザインになっている。

初の著書「KEEP MOVING 限界を作らない生き方」（誠文堂新光社）を今月、出版した。単なる闘病記ではない。音楽、マウンテンバイク、洋服……。これまで夢中になったものを追いかけて続けていると、全てが現在の活動につながっていた。そのことを伝えたかった。

21日は病気への理解を呼び掛ける「世界ALSデー」。いまだに有効な治療法は確立されておらず、症状は徐々に進行していくが、休んでいる暇はない。「ALSが治る未来は、必ず来る。創れると信じています」＜文と写真・矢澤秀範＞

■人物略歴 米ロサンゼルス生まれ、東京育ち。一般社団法人「WITH ALS」を設立し、代表理事を務める。

多様性考える書籍選定 市UD審、幼保小中に配布へ

中日新聞 2018年6月21日 静岡

性別や国籍の違い、障害の有無などを超えたまちづくりを目指す浜松市ユニバーサルデザイン（UD）審議会の二〇一八年度第一回会合が二十日、市役所であり、市内の幼稚園・保育園や小中学校に多様性の理解を促す書籍を配る事業に取り組むなど一八年度の事業計

画が明らかになった。

浜松市は二〇年の東京五輪・パラリンピックでブラジルパラリンピック選手団を受け入れ、国から共生社会ホストタウンに指定されている。

一八年度事業では、ホストタウンとして「心のUDの醸成」を進めるため、多様性の理解を促すために保育園や幼稚園、小中学校に配る絵本や書籍を選び、一九年度に配布する。市が独自の冊子を制作することも検討している。

また、中央図書館や城北図書館にUD関連の絵本や書籍をまとめた特設コーナーを期間限定で設ける。

そのほか、色覚障害者や高齢者に配慮するため見えにくい色の組み合わせを示し、男女の役割を固定化させないような印刷物作成マニュアルをつくり、市役所の各課に配る。

(佐藤浩太郎)

障害者に安心を 宮城県に要望書提出 社会福祉法人など 河北新報 2018年6月21日

宮城県内36の社会福祉法人や障害者、支援者団体でつくる「みやぎアピール大行動実行委員会」は19日、障害福祉施策の改善などを求める要望書を村井嘉浩知事に提出した。

障害者の医療体制整備、障害者差別禁止条例の制定、就労支援など15項目を求めた。旧優生保護法（1948～96年）下で知的障害などを理由に繰り返された強制不妊・避妊手術について「過去と向き合い、原因をしっかりと検証すべきだ」と口頭で申し入れた。

同委員会の鷲見俊雄代表は「障害者が安心して暮らせるよう、県の社会福祉政策に反映させてほしい」と語った。村井知事は「簡単ではないが、誰もが安全に暮らせる社会を目指して一歩ずつ努力していきたい」と話した。

名古屋城にEV求めデモ 「名古屋だけの問題ではない」 朝日新聞 2018年6月21日

名古屋城木造新天守にエレベーター設置を求め、名古屋市役所前をデモ行進する障害者ら＝2018年6月19日午後、名古屋市中区、戸村登撮影



名古屋市が2022年完成予定をめざす名古屋城木造新天守。エレベーター



を設けないという同市の決定に、障害者らが反対の声を上げている。



街のシンボルはどうあるべきか、「名古屋だけの問題ではない」と訴えている。

19日、愛知県内外の約600人（主催団体発表）が市役所の周りで手をつなぎ、抗議集会を開いた。「自治体による差別や人権侵害を認めない」と訴えた。

集会は市中心部で始まり、参加者は市役所まで行進。庁舎の周囲に並び、「エレベーター

設置を実現するまで闘うぞ」と声を上げた。(関謙次、北上田剛)

午前11時25分 共産党愛知県議団を車いすの上田孝さん(67)が訪れ、「エレベーターが最善のバリアフリーだ」と申し入れた。障害者団体はこの日、県議会や市議会の各会派を回り、協力を要請した。

午後0時10分 名古屋・栄の久屋大通公園に障害者団体が集まり、抗議集会が始まった。参加者は「史実よりも人権」「河村市長 ドローンに乗ってみて」などのプラカードを掲げた。大阪市から来た永野賢史さん(44)は「これは名古屋だけの問題じゃない」。

壇上でマイクを握った沖縄県宜野湾市の山口彩夏さん(29)は「河村たかし市長は私たち障害者を荷物のように見ているから、ドローンのような発想が出るのではないかと憤った」。

午後0時58分 市役所に向かってデモ隊が出発。「新技術でごまかすな」などと訴えながら歩いた。近くで見守った名古屋市名東区の無職の男性(67)は、「障害者の言い分は分かるが、忠実な復元を望む人も多い。難しい問題だ」。

午後4時3分 参加者が市役所の周りで手をつないだ。愛知障害フォーラム事務局長の辻直哉さん(46)は「市長は全国から集まった仲間の声に耳を傾けてほしい。今日を活動のスタートにしたい」。その後、辻さんら代表者が市役所前でハンガーストライキに入った。

河村市長 抗議「誤解では？」

河村たかし市長は、エレベーターを設置せず、歩行支援ロボットなど代わりとなる新技術を開発する方針を出している。19日も、「もうロボット(の完成)は目の前。そういう技術の方が、はるかにバリアフリーになる」と記者団に持論を述べ、障害者の抗議にも「何か誤解があるのでは」と理解を示さなかった。

資材費94億円 市議会に議案提出

名古屋市議会の6月定例会が19日開会し、河村たかし市長は、名古屋城木造新天守に使う木材を調達する請負契約を結ぶ議案を提出した。契約額は94億5540万円で、木造化工事を施工する竹中工務店と締結する。総額8200万円の一般会計補正予算案も提出した。

県 介護保険施設の事故報告基準、明確に 要綱改正案 /岐阜

毎日新聞 2018年6月21日

県は20日、介護保険施設での事故防止策を強化するため、運営の基準要綱やマニュアルの改正素案を有識者検討会に示した。県に対する事故報告基準を明確にするとともに、事故防止委員会に施設外の第三者を登用するよう義務付けている。8月中に取りまとめる考え。

施設が報告義務を負う事故を「死亡のほか骨折、裂傷、やけど、誤嚥(ごえん)、異食、誤薬で医療機関を受診、入院したもの」とマニュアルで明確化。従来は「転倒などでけが、または死亡した場合」としていた。

重大事故や虐待の報告期限も、既定の「発生から24時間以内の第1報」に加え、事故原因や事業所対応を「発生から1週間以内に第2報として提出」するよう追加。これ以外の事故も「1週間以内の報告」を義務付けた。

基準要綱では、事故防止委員会で第三者の委員登用を義務化。死亡や入院1カ月超の重大な介護事故については、同委員会を「速やかに開催し、分析する」と新たに定めた。

県内の介護保険施設で相次ぐ死傷事故や虐待を受けた措置。県は8月に追加開催する検討会で、改正内容や管理者の責務などを解説したガイドラインも示す考え。【岡正勝】

虐待防ぐ鍵は「交流持つこと」 県立大・三上教授に聞く 岩手日報 2018年6月21日

「子どもが保護されたり通報があるケースは、虐待という氷山の一角だ」と指摘する三上邦彦さん＝滝沢市・県立大



痛ましい児童虐待事件が後を絶たない。今月5日、北上市で1歳9カ月の長男に十分な食事を与えず死亡させたとして20代の父親が逮捕された。6日には東京都目黒区で、5歳女兒を衰弱させ放置し死亡させた疑いで両親が逮捕され、社会に衝撃を与えた。虐待の背景や、子どもを守るために関係機関や地域がどう関わるべきかについて、県立大社会福祉学部教授の三上邦彦さんに聞いた。

北上市の事件は、父親によるネグレクト（育児放棄）が疑われている。三上さんは「市や児童相談所、警察、教育機関などで組織する要保護児童対策地域協議会が機能していなかったことが大きい。関係者間でリスク（危険度）を整理できていなかったのではないかな。市だけの責任ではなく、対応の検証が極めて重要だ」と強調する。

同時に、関係機関のマンパワー不足も指摘。「限られた人数の専門職だけでは、動きたくても動けない現状がある。体制を強化し（児童福祉の）質と量を確保していくことが、本県全体の課題だ」と語る。

本県の2016年度の児童虐待対応件数は1477件。内訳は心理的虐待が759件（51・4%）、身体的虐待388件（26・3%）、ネグレクト304件（20・5%）と続く。

子どもを守るために周囲の人たちが力になれることもある。「交流を持つことが大切。例えば農家の人が野菜を持って行ってあげるような、ちょっと余計なお節介ぐらいの関わり方が防止につながる」と三上さん。虐待が疑われるような場合は「匿名でも構わないので、勇気を出して市町村か児相に通報してほしい」と呼び掛ける。

岡原功祐 自傷する少女の写真集 心の悲鳴に寄り添う瞳 毎日新聞 2018年6月20日

「写真を撮るといのは、（被写体の）存在を肯定する行為だと思うんです」。京都在住の写真家、岡原功祐（こうすけ）（38）はこう話す。自傷行為を繰り返す女性たちを取材したフォトドキュメンタリー『I b a s y oー自傷する少女たち“存在の証明”』（工作舎、3024円）を今春刊行した。一人一人のストーリーをつづった文章とモノクロ写真約60点から成る本書は単なる記録を超え、「人間の尊厳とは何か」と心の奥底に問いかけてくる。

きっかけは知人女性の一言だった。「私には居場所がない」。泣きながら自傷行為を打ち明けられた。「僕自身、昔から集団になじめない性格で、独学で写真を始めた頃もどこか所在なさを感じていた。『居場所』はいじめや自殺など現代の日本を表すキーワードだとも思い、テーマにしよう決めました」。まずは自傷する当事者のことを知ろうと2005年にインターネットで取材相手を募り、「自分を見つめ直したい」「誰かの役に立てれば」と返事をくれた人たちと連絡を取り始めた。

本書に登場する5人は過去にレイプや虐待などの被害を受け、みな心に傷を負っている。ページの大半を占めるのは目を背けたくなるほど過酷な現実だ。だが岡原は彼女たちを見つめ、寄り添い続ける。時には友達のように雑談し、電話があれば駆けつけ、自傷行為を目の当たりにすることもあった。「カメラマンとしての僕の立ち位置はあいまいで、でもそこを割り切る必要性をあまり感じなかった」。見たこと、聞いたことを淡々と記録した文章と写真は、かえって切実で生々しい。

個人のストーリーとは別に、この本が誕生するまでのドラマもある。5年以上かけて撮影した写真は当初、出版先が見つからなかった。「せめて被写体になった彼女たちの力になれば」と14年に手製の写真集6冊を作り、ネットを通じて世界中の人に貸し出しを始めたのだ。見た人がメッセージを書き込めるよう本の半分は白紙に。約3年半で30カ国近くを巡り、300人以上から応援や共感のコメントが寄せられた。本書はそのメッセージ

の一部も紹介している。

岡原はスーダンの内戦を捉えた写真で05年に上野彦馬賞を受賞。コロンビアで麻薬戦争に生きる若者や、米国を目指す不法移民を取材してきた。一貫してカメラで記録してきたのは、日常とはかけ離れたように感じられるもう一つの現実だ。「写真を通して、その場にはいない鑑賞者を物語へと案内し、僕が関わった人を紹介するような感覚がある。見る人の感情が動けば、その物語が自分の生きている社会で実際に起きていることだと認識できるのではないのでしょうか」と岡原。矛盾に満ちたこの世界で、「白黒では割り切れないストーリーを伝えたい」と、今は沖縄にカメラを向ける。

『I b a s y o』の写真展が東京・京橋の「Tokyo Institute of Photography」(03・5524・6994)で開催中。7月1日まで。月・火曜休み。【清水有香】

花谷寿人の体温計 結愛ちゃんとピッピ

毎日新聞 2018年6月21日

現場には絵本が供えられていた。手を合わせる人は絶えない。

東京・目黒のアパートで船戸結愛ちゃん(当時5歳)が虐待の末に死亡した事件で、両親が逮捕されて2週間。結愛ちゃんが書かされた「反省文」は、読む人の心を今も揺さぶり続ける。

「もうあしたは ぜったいやるんだぞとおもっていっしょうけんめいやって パパとママにみせるぞというきもちで やるぞ」。覚えてたの文字で書くのは、もっと楽しいことだったはずなのに。

20年前の1998年から児童虐待をテーマに、本紙で同僚記者と繰り返し報道した。その後、児童虐待防止法ができ、児童相談所など関係機関の連携は進んだ。状況は変わったか。いや、むしろ悪くなっている。

78年、ドイツ書店協会から受けた平和賞の授賞式で「子供のしつけに暴力は不要」とスピーチをした世界的な作家がいる。「長くつ下のピッピ」などで知られるスウェーデンのアストリッド・リンドグレンだ。当時、欧州でも体罰は必要とされた。

彼女は戦争と暴力が繰り返される歴史を憂えていた。ではどうすれば暴力と縁を切れるのか。

「私は根本から始めなくてはならないと考えています」「物事を解決するには暴力以外の別の方法があることを、私たちはまず自分の家庭で、お手本として示さなくてはならないのです」

暴力にさらされないで育った子供たちこそ、未来を変えられると信じた。「(成長した)彼らは、戦争や平和、そしてどのような社会を望むのかについて、判断を下すことでしょう。暴力がのさばり続ける社会を望むのか、あるいは平和に、たがいに連帯感を持って生きていきたいのか……」

スピーチを読むと胸に響く。スウェーデンが世界で初めて子供の体罰を法律で禁じるきっかけにもなったほど力強い。

結愛ちゃんの叫びを社会は受けとめられるのか。リンドグレンのように立ち上がり、全身全霊で問いかける政治家や文化人は現れないのか。政府は再発防止策を講じるというけれど。

「長くつ下のピッピ」の主人公は元気っぱいの少女だ。結愛ちゃんも大きくなって本を開き、ピッピと出会ったかもしれない。(論説委員)

